

---

## D班（長崎）

---



ユースリーダー 吉内 葵  
班長 片野 将成  
山王堂 光  
面 璃歩  
清水 琉惺  
新井 翔太

私の  
平和宣言

## 平和の尊さを伝え続ける

## 派遣報告

## 平和への道標となるために

戦後80年の長崎へ赴き、「日常」の大切さを強く実感した。1945年8月9日、午前11時2分、一発の原子爆弾により、当たり前が続くと思っていた日常が壊されてしまった。その苦しみ、痛みは計り知れないものであつただろう。二度と同じことが繰り返されてはならない。そのために私たちに何ができるのか。

それは長崎で学んだこと、感じたことを後世に「伝えていく」ことだと思う。あの日長崎で起こったことはただの過去ではなく、私たちの今とこれからは繋がっている。たくさん未来を奪う戦争をなくし、平和な世界を実現するために、私は伝え続けていきたい。小さな積み重ねだけでも、そのひとつひとつが平和の第一歩になると私は考える。

戦争を起こすのは人間であり、平和の世界を作ることができるのも人間である。小さな綻びから、世界は残酷な未来に傾いていく。私たちひとりひとりが他者を尊重し、歩み寄ることを忘れてはならない。

被爆者の方々が私たちに託してくれた「平和という花の種」を育て、満開になる未来をつくっていけるように、私は今日も「平和」を祈り続ける。

## 応募理由

私は小学5年生の時に、長崎派遣プログラムに参加いたしました。そこで学んだことは、今も私の心に深く刻まれています。世界では今この時も戦争が起こっていることを耳にし、自分にできることは何かと考える機会が増えました。再び長崎の地へ向かい、戦争の記憶に触れ、その答えを見つけたいと思いました。また、ユースリーダーとして、子どもたちの学びに寄り添い、その手助けをしたいと思いました。

私の  
平和宣言

## 違いを認め合い思いやりの世界へ

## 派遣報告

## 長崎原爆から学んだこと

私は8月7日から8月10日までの4日間長崎、小倉を訪れて学んだことが沢山ありました。長崎へ行く前の自分は原爆について浅い知識しかありませんでしたが、原爆資料館で見た写真や映像を見て本当の原爆の恐ろしさについて気付かされました。また、被爆した人は後遺症やまわりからの差別に苦しめられ大変な思いをしたという話から原爆は命だけでなく、生き残った人の人生までも奪ってしまうものだと考えさせられました。現在は被爆した人の平均年齢が86歳を超え、お話を聞くことはだんだん難しくなっています。そのため、このような戦争や原爆の被害を無くしていくためにも一人一人が後世につないでいき、原爆の恐ろしさを風化させないことが大切だと思います。私はこの長崎派遣を通して学んだことを活かし、自分に何が出来るかをしっかり考えて行動をしていきたいです。

## 応募理由

私が平和学習に参加を希望する理由は戦争や原爆の悲惨さについて、自分の目で見て学び、平和の大切さを実感したいと思ったからです。長崎での平和学習を通して、今の平和が当たり前でないことを理解し、自分にできることを考えるきっかけにしたいです。また、平和学習の学びから班の方やユースリーダーの方たちと意見を交換して戦争を起こさないための考えや重要なことを出し合い理解を深めていきたいからです。

私の  
平和宣言

## 身近な人から伝える平和の大切さ

## 派遣報告

## 4日間の学びを思い出だけにしない

私は今回戦後80年という節目の年に、長崎で4日間平和学習に参加することが出来ました。実際に目で見て耳で聞き、原爆の悲惨さと平和の大切さを強く感じました。その中でも平和公園は、世界中から贈られた平和の像や碑が立ち並び、戦争のない未来を願う人々の想いが伝わってきました。いつも画面越しに見ていた式典に参列しました。忌々しさよりも参列されていた全員が平和な世の中を願っているように感じとる事が出来ました。

長崎原爆資料館では、被爆した建物の写真や焼け焦げた衣服、溶けたガラス瓶など、原爆の熱線と爆風の恐ろしさを目にしました。被爆体験を語る講話では、私たちに話をする度に当時の辛い記憶が蘇るはずなのに「同じ悲劇を繰り返さないために伝える」と話してくださいました。その姿に、平和とは毎日を大切に過ごすこと、私たち一人ひとりの意識だと気付きました。

今回の学習を通して、戦争や核兵器の恐ろしさを学ぶだけでなく、命の尊さや互いを思いやる心の大切さも学びました。私は友達に今回の学びを伝え、人と人とが互いに尊重し安心して1日1日を笑顔で暮らせるように大切に過ごしていきます。

## 応募理由

学校からこのプログラムの紙が配布され、今年こそ参加したいと思い応募しました。僕は学校では、それほど原爆に触れてこなかったため、今回参加して自分自身の考えの幅を広げ、未来に活かせる学びを深めたいと思ったからです。

また、他校の生徒と一緒に平和について話し合うことで自分と違う意見交換にとっても興味がありやって見たいと思いました。現地に行って体験し考え、今の世の中に何が必要なのかを考えたいです。

私の  
平和宣言

## この先もその先も未来に伝えていく

## 派遣報告

## 戦争はまだ終わっていない

「学校に被爆した人達が運ばれ、殺してくれ、殺してくれという声が聞こえる。学校は人間処理場になってしまった。」これは被爆者の三瀬さんが言っていた言葉だ。私は、被爆体験講話で聞いた話がありありと思い浮かんだ。人のうめき声が周りから聞こえてくるなんて、想像するだけでめまいがすると思った。もし、私が被爆した人たちの立場だったら、水が飲みたいのに飲むことができない苦しさ、痛さに耐えきれず、「殺してくれ」と言っていたら。三瀬さんのお話を聞いて、たった一発でこんな悲惨な状況を作った原子爆弾の恐ろしさや戦争の悲惨さを実感した。

でも、そんな原子爆弾を作ったのもまた人間なのだ。人はなぜ人と殺し合いをするのか。同じ「人」という種類に属しているのだから、戦争をせずにお互いに協力するべきなのに。

私には、今、戦争を止める力はない。でも、戦争の悲惨さ、残酷さ、原子爆弾の被害の大きさを伝えることはできる。だから、この先、私が大人になっても、戦争を「もう終わったこと」にせず、その先の未来に戦争の恐ろしさを伝え続けていきたい。もう、誰も戦争の傷や見えない心の傷に苦しめられないように。

## 応募理由

小学生の頃に学んだ「ちいちゃんのかげおくり」が心に深く刺さったことを中学生の今でも覚えています。戦争が起こした家族がいない淋しさと孤独感を思うと、胸が締め付けられるような思いがしました。私が原爆について考えるとまず広島が思い浮かびます。それは広島は被害のほうがよく聞いたことがあるからだと思います。唯一の被爆国に住む者として、もうひとつの爆心地長崎について知りたいと思ったので応募しました。

私の  
平和宣言

## ぼくは伝え続けることを忘れない

## 派遣報告

## 平和

ぼくは、この平和学習に参加して、学んだことが沢山あります。

桐谷さんからご家族が被爆されたお話と、三瀬さんから10歳で被爆された時のお話をお伺いして、こんなにつらく悲しいことはないとしても心が痛くなり、このようなことはもう二度とあってはならないと思いました。

そして、長崎原爆資料館で大きな給水タンクの脚が曲がっている展示を見て、原爆の恐ろしさを感じました。

長崎平和宣言の中で長崎市の鈴木市長は、「地球市民として、共感と信頼を積み重ね、平和をつくる力に変えていきましょう。」とおっしゃっていました。

初めて会う人とお互いに理解を深める意見交換会の中でも、お互いを思いやり、話し合うことは大切だと、改めて感じました。

世界の中では、今も争いが続いています。

平和であるために、ぼくが学んだ平和の大切さお互いを思いやり、話し合いを重ねることの意味を伝えていくことを忘れません。

最後にこの平和学習に関わってくださった皆様どうもありがとうございました。

## 応募理由

僕は戦争を経験した事はありません。三年生の授業で、ちいちゃんのかげおくりを学びました。初めて戦争を学んで、ちいちゃんの気持ちになったら、もっと生きたかっただろうと思った。今僕が家族と食事する事、安心して眠れる事も平和のおかげだと思う。僕が小さい頃亡くなった曾祖父も空襲を体験しました。戦後80年、この平和がずっと続くように、何か出来ないかと思い参加を希望しました。



## 平和な世界を築くためには、相手を理解して 分かり合うことが重要

### 派遣報告

#### 長崎平和学習派遣についての主な体験と感想

長崎原爆資料館で印象的だったのは、中身が炭化した弁当箱です。お弁当の裏には、その人の名前が彫られており、もしかしたら家族が作ってくれたお弁当かもしれない、それを食べられずに突然に亡くなったことに残酷さを感じました。自分ならとても耐えられないという気持ちになり、戦争の悲惨さを感じました。

青少年ピースフォーラムでは「普通とはなにか」という議題をもとに会議しました。「自己紹介・違いとは・普通じゃないといけないのか」の三段階で進められ、特に印象に残ったのは、「違い」について意見です。肌の色による人種差別や、地位や身分、財産などの意見があり、人が多いほど意見もたくさん出て反対意見も生まれるということを知りました。

この長崎派遣では全く関わり合いのなかった方々と一緒に、3泊4日を過ごしました。人は分かり合うことはできるけれど、喧嘩もします。しかしそうした喧嘩も、相手を理解しようとする気持ちがあれば、乗り越えることができます。しかし、その喧嘩が国同士になるとやがて戦争になってしまいます。

だからこそ、平和な世界を築くためには、相手を理解して分かり合うことが重要だとおもいました。

### 応募理由

今ウクライナとロシアの戦争、シリアでの戦争が起きていることをテレビで見て、たくさん人が死に、悲しい人、困っている人を知り、私は悲しい気持ちになりました。日本でも昔戦争があったことを知りました。長崎・広島では原爆が落とされたくさん人が亡くなったことを知りとても悲しくなりました。でも戦後その地できれいなく生活し、今を生きている人たちのことをすごいと感じたので、実際に現地へ行き見聞きたいと思いました。

## E班（長崎）



ユースリーダー	落合	義人
班長	小林	美釉
	佐野	麻桜
	茂木	紗良
	上田	怜生
	柴田	紗江



平和の種を蒔き、それを蕾に育て、花咲かせる  
太陽のような人間になる。

## 派遣報告

### 平和は人間の精神から生まれる

「平和とは戦争のないことではなく、美德であり、精神のあり方であり、慈悲と確信、そして正義への性向である」と哲学者スピノザは答える。私が実際に長崎に行き、感じたことは論でも法でもない。戦争の残酷さ、平和の尊さ、それを伝え続けた被爆者の精神である。人類が恒久平和を目指していくことは、軍備体系や政治システムの問題を変えていくことではない。人間の精神を育て、人間の一種の醜い一面を対話で変換していくことだ。平和とは一つの無形の価値であり、精神の文化的な状態であるということを通じておきたい。国家も人であり、企業も学校も家族も全ては人である。平和は人間の精神から生まれる。

さて、実際に私たちが平和に向けて動いていくとき、急進的な動きをしてはならない。時間を掛け、漸進的な活動を行っていくべきだ。「善いことというものは、カタツムリの速度で動くものである」と非暴力主義者ガンジーは言う。戦争を終わらせるために武力で対抗してはならない。核兵器を無くしていくために焦ってはいけない。被爆者の体験を紡いでいき、教育化していくことこそが大切である。被爆者がいなくなる未来が近い今、日本から世界へ平和の精神を拡大していきたい。

## 応募理由

10年前、私自身も藤沢市平和学習に参加させていただきました。当時平和について考えたことがなかった私ですが、平和学習で戦争が如何に残酷で、平和が如何に尊いことなのかを学ばさせていただきました。小学生ながら平和学習が大事なことに気づけたのは、この平和学習があったからです。私もその体験者だからこそ、お世話になった藤沢市、またこれから成長していく子供たちのお手伝いを出来れば良いなと考えているからです。

私の  
平和宣言

## 音楽と医療で世界中の人々の心を平和にする

## 派遣報告

## 平和を想う気持ちは心の国境を越える

青少年ピースフォーラムでのテーマは「違い」。全国の自治体から派遣された青少年が集まり性別、年齢、住んでいる場所もまるで違う、つまり人生の背景を知らない初対面同士での、その「違い」についてのディベートは貴重なものだった。

特に話題になったのは、「なぜ理解し難い文化が生まれるのか」という問い。それは、自分の文化の幸せを一番に考えてしまうから。出会った相手の文化の幸せも願う気持ちがあれば、文化の違いに壁はなくなると感じた。また、それぞれがこの問いに思いを巡らせている時間が、お互いの考えを伝えあったその時間こそが、何もかも違う私たちの心の距離を縮め、壁をなくしてくれた気がした。

「違い」から生まれる「心の国境」は誰にでもある。しかし、相手の幸せを願い、平和を想う気持ちは心の国境を越えて、人の心を救うことが出来ると確信した。

いつか、誰かの心を癒すためにと14年間磨き上げてきたピアノの音楽と、これから学ぶ医療で、精神的にも身体的にも人を幸せにし、助けることが、被爆者の子孫が消えることのない未来を生きる、私の使命ではないだろうか。

## 応募理由

学校で、「音楽コンクールで歌った『Orizuru』の歌詞をもとに、平和の尊さ、原爆の恐ろしさと考え、自分の声で世界に発信する」という課題を設定し、探究活動を行っています。その中で実際に被爆地である長崎を訪れ、被爆者の方々が現代を生きる私たちに残したいメッセージは何かを、また、原爆がもたらした甚大な被害を、自分の五感全てを使って捉え、探求活動をより深めたいと思ったからです。



争いがなく、互いに尊重し合う平和な社会を目指します。

## 派遣報告

### 平和とは～未来へ発信し続ける

平和には二種類があると思います。ひとつ目の消極的平和とは、物理的に争いがない状態です。戦争が起きると、人命や家、財産などすべてを失ってしまうため、その状態は平和とは言えません。戦争がないことは大切ですが、それだけでは本当の平和にはならないと思います。

ふたつ目は、差別やいじめ、貧困がない積極的平和の状態です。人々が心から幸せだと感じられる社会こそが、本当の平和だと思います。戦争がなくても、差別や貧困があると、人々は幸せを感じにくいからです。たとえ戦争がなくても、不平等な社会では、心から平和を感じることは難しいと思います。平和な世界を作るためには、まず消極的平和を守り、その上で積極的平和を作っていくことが大切だと思います。平和はただ「戦争がないこと」ではなく、みんなが幸せに暮らせる社会を作ることだと思います。これが、本当の平和に近づくための道だと考えます。私が長崎派遣で考えたことは、世界で核兵器をなくせば平和に近づく大きな一歩になるということです。

## 応募理由

昔から、戦争に関心があり小さい頃に一度沖縄県のひめゆり平和祈念資料館に行った際に戦争の悲惨さを身をもって体験ができました。その時の体験を活かしてもう一度戦争について学習したいと強く思ったからです。

加えて、私の中で戦争についての「なぜ」がたくさんあるためインターネットで調べるという一つの手段もありますが、自分で体験した方々に戦争の真相を聞き今後の学習に活かせると思ったので今回参加を希望しました。

私の  
平和宣言

## 人の意見を尊重しあえる社会を目指す

## 派遣報告

## 平和への感謝

今回の研修で私が特に平和の大切さについて考えることができた場所は、被爆クスノキ、原爆資料館、原爆死没者追悼平和祈念館、そして平和祈念像です。まず最初に紹介するのは被爆クスノキです。とても大きく立派でした。でも木の中からは、原爆の爆風で飛んできたとても大きな石が出てきており、よく倒れずに生き残ったなと思いました。実は、私のおじいちゃんおばあちゃんの家近くの公園に、被爆クスノキの二世が植えられています。このクスノキを見て、原爆被害を風化させてはいけないと、気づくことができました。次に紹介するのは、長崎原爆資料館と原爆死没者追悼平和祈念館です。まず資料館についてですが、泉や滝のような場所があって、それは当時の被爆者の方々が水を欲しがりながら亡くなったことを慰めるために造られたことを知り、あらためて人々を無差別に殺傷する原爆被害の怖さと戦争の残酷さを実感しました。平和祈念館で印象に残ったのは追悼空間です。そこには、亡くなった方々の名簿があるのですが、その中の一つには名前が書かれていません。それも原爆で亡くなった方々の名簿なのですが、白紙の理由は、名前が分からない方々が沢山いるからです。そのために白紙の本が一冊あるのです。私も亡くなったすべての方々を弔いたいとあらためて思いました。最後に平和祈念像です。記念像の手や顔には意味があります。点を指す右手が原爆の脅威、水平に伸ばす左手が平和を意味し、軽く閉じた目が戦争犠牲者たちへの冥福を祈っています。私は今回、戦争の怖さを学びました。そのことが、平和のありがたさを実感することにつながり、この思いを家族や友達に伝えたくくなりました。私にとって、平和学習長崎派遣プログラムは、とても良い経験になりました。皆さんも参加してみたいはかがでしょうか。

## 応募理由

私が原爆被害の事を知ったのは、日本の歴史という本がきっかけです。遠い昔のことかと思っていましたが、今なお、被害者の方々が苦しんでいて、ご高齢なのに被爆被害のことを伝えながら核廃絶活動をしているお姿を見て、原爆の怖さを知ってる人たちがいなくなったらどうなるのだろう、また、戦争を始めるのは、戦争の怖さを知らないからだろうと考え、実際に現場に行って学びたいと思ったことが、プログラムに参加したい理由です。

私の  
平和宣言

## 少しの思いやりで平和につながる

## 派遣報告

## 平和って何？

僕は平和学習長崎派遣プログラムで講話を聞いたり資料館を見たりしましたが、特に「平和とは何か」という言葉が印象に残りました。

「平和とは何か」正直答えは分かりませんでした。でも分からないということは自分たちで考えてみる、そういう気持ちが伝わってきました。なので平和とは何か考えてみたら、ビックリするほどありました。戦争をしない、核兵器を使わないということや、差別、いじめが無いということもあります。

じゃあどうすればいいか、そう考えたとき、ピースフォーラムで「違いって何？違いっていいこと？悪いこと？」というテーマで意見交換をしたことを思い出しました。そして「思いやり」という言葉が頭に浮かびました。1人1人のことを尊重して受け入れる、ということが大切だと思いました。少しの思いやりが、平和への道のりになっていくことを信じています。

明日、この世界で生きているかわからないような状況にしてはいけない。今僕たちは平和への種を持っている。その種が満開の花になれば平和になる。そう信じて動いていく。

## 応募理由

ぼくが長崎派遣プログラムに参加したい理由は2つあります。1つ目は、自分は広島・長崎原爆についてよく知らないから、こういう派遣で実際に見たり体験したりできると、本を読んで勉強するよりすごく勉強できると思って、この長崎派遣プログラムに参加して、たくさん学びたいと思ったからです。2つ目は、戦争をすること、原爆を落とすことが、どれだけ良くないことかを勉強して、家族や友達に教えてあげたいからです。

私の  
平和宣言

## 長崎の記憶を忘れず平和（命）を守ろう

## 派遣報告

## 貴重な長崎での時間～自分に何が出来るのか～

「今の私の生活は当たり前ではない」これは、私が長崎であまりにも残酷な事実を知り、強く感じた事です。原爆によって多くの人が命を落とし、生き残った人も苦しみなから生活しなければなりません。さらに、その苦しみは、被爆者の子孫として生きる人々にも未だに続いています。私は、資料館の訪問や被爆者の話を聞くことで、その事を改めて実感しました。行く前は「戦争はしかたのないこと」という気持ちが少なからずどこかにあったと思います。実際に見て学んでみると、今まで知らなかった多くのことを深く考え、平和とは何かと考える貴重な時間になりました。

もし自分が同じ時代に生きていたら耐えられるのか、どれほど大変だっただろうと考えると胸が痛みます。

私たちは戦争を体験していない世代です。平和である事、命がある事が当たり前だと思っ込んでいます。今回学んだ事をしっかりと受けとめ、次の世代にも伝え続けていくことが大切だと思いました。これからも平和について考え、命の大切さを忘れずにしっかりと生きていきたいです。

## 応募理由

私たちは戦争を知らない時代に生まれました。でも、むかし広島と長崎ではたくさんの方が原子爆弾で大変な思いをしたと聞きました。そのことをきちんと学びたいと思いました。今は被爆した人たちも高齢で、話を聞けるチャンスは少なくなってきました。このプログラムに参加して、学んだことを友達や家族にも伝えたいです。

## F 班（長崎）



ユースリーダー	加藤	雄飛
班長	柴田	へミン
	石尾	紗良
	井上	桃奈
	遠藤	菜那子
	関矢	輝



## 本当の平和とは何かを考える

### 派遣報告

#### 壁を超えて平和を考える

私達は戦後 80 年という節目に平和学習を行うことができました。今、世界は大きな転換点を迎えていると思います。ロシアのウクライナ侵攻やイスラエルのガザ爆撃など、とても平和な世界とは言えません。日本においても被爆者や戦争体験者の高齢化に伴い戦争体験の継承が困難となり、戦争の惨禍を理解していない人が増えています。このままでは間違いなく人間は負の歴史を繰り返してしまうでしょう。今が平和を守る為に力を合わせる正念場だと考えます。だからこそ、特定の世代、特定の国だけで平和活動を行うのではなく世代を超えて、国境を超えて、平和への想いを一つに力を合わせる必要があります。そうしたことを踏まえ今回の平和学習では世代を超え、地域を超え平和への想いを共有できたことは大変有意義な機会だったと考えます。この機会を踏まえて一市民として平和の大切さを訴えて、壁を越えて平和の輪を広げていきたいと思っています。

### 応募理由

今回のプログラム派遣を希望する理由は 2 つあります。

1 つ目はユースリーダーとして平和学習を行うことで、単独で訪れるよりも主体的に平和活動への理解が深まると考えたことです。

2 つ目は多世代の団体で訪れることがとても有意義だと考えているからです。同年齢のみの団体で平和学習を行うよりも、中学生や高校生と共に行うことで、自分にはない考えや価値観を共有できると考えています。

私の  
平和宣言

## 被爆者の思いを受け継ぎ平和を未来に繋げる。

## 派遣報告

## 平和は人類共通の世界遺産

80年前の8月9日11時2分、長崎に原子爆弾が落とされた。約74,000人の尊い命が奪われ、時のアメリカ大統領であるトルーマンは、原爆を日本に落とした理由についてこう答えた。「何万何千もの米国青年の生命を救うために原爆を使用した。」私はこの言葉を聞き、戦争の愚かさを感じずにはいられなかった。戦争はどんな理由を並べようとも、流した血の数を考えれば決して正義にはならない。長崎に落とされた、たった一発の原爆で、家族や友人、大切な人を失い、心と体に生涯消える事のない傷を与えた原爆。それを正当化する正義など、どんな言葉を並べようともないのだ。被爆者の方の講話で、【平和は人類共通の世界遺産】という言葉聞いた。本当の平和とは日常の生活が送れるという事だ。家族がいて、ご飯が食べられ、学校に通い、くだらない事で笑い合う日常。これこそが、真の平和であり、人類にとってかけがえのない人類共通の世界遺産なのだと思う。また、これから先の未来に戦争を無くす為、また、核兵器が二度と使われないための最重要課題。それは、被爆者の高齢化が進む中、被爆者の方々の実体験に基づく貴重な証言をどう受け継いで行くかである。平和に向け、戦争の恐ろしさ、惨さ、悲惨さの記憶を語り継ぐためには、若い世代一人ひとりが「戦争と平和」について少しでも意識し、小さな事でも行動する事こそが、真の平和な世界へと広がる架け橋となるのだろう。

## 応募理由

私は幼い頃から戦争や平和について興味があり、戦争の映画や本を読んでいた。修学旅行で広島や沖縄に行って戦争や平和について話を聞いたり、学校の授業で少し触れてきましたが、私の周りの友達はそのような話に関心な人が多く、他人事と思う人が多いなと思いました。戦争体験者が減少している中で私たちがこの思いを受け継ぎ、理解しないといけないなと思い希望しました。

私の  
平和宣言

## 平和への思い、心に灯そう

## 派遣報告

## 広島、長崎を知ることから始めよう

初めて訪れた長崎は、私にとって驚きの連続でした。ボロボロになった長崎医科大学の配電室、爆風でずれ、熱で溶けた鳥居、枯死寸前の状態から蘇ったクスノキ。教科書の中だけで、文字や写真だけで知ったと思っていた被爆の現実がそこにありました。10歳の時に被爆した三瀬清一郎さんからは、戦争の悲惨さとともに、今もなお核兵器が使われる恐れがあることを教えていただきました。実際に見て、歩き、聞いて、感じることで戦争の悲惨さ、原爆の恐ろしさが心に刻まれました。平和学習に参加しなければ、このように実感することはなかったと思います。私たちの使命は、この体験をより多くの人と共有し、平和への思いをより強く持ち続けていくことです。第2次世界大戦から80年が経ちましたが、戦争はなくなっていません。唯一の戦争被爆国として、戦争や被爆の悲惨さを世界に伝えていくことが大事だと思います。そのためにも、まずは私たち一人一人が広島や長崎のことに興味を持ち、知り、学んでいくことが必要です。私もできることから取り組んでいきたいと思っています。

## 応募理由

私は戦争が嫌いです。痛いだろうし、怖いし、家族や友達が死んでしまうかもしれない。だから嫌だ。周りも皆そう考えていると思っています。でも、昔はどうだったのか。第二次世界大戦の時、日本人は何を思い、日々生活していたのか。そして原爆を落とされ、被爆した人はどうなってしまったのか。当時の日本人にとって、「平和」とは何だったのか。実際に被爆地へ行き、見て、聞いて、感じるために平和学習への参加を希望します。

私の  
平和宣言

## 戦争の恐ろしさを伝えていく

## 派遣報告

## プログラムをとうして

私が今回この長崎派遣プログラムに参加した理由は、去年小学6年生の時に総合の授業で長崎の戦争について学び、もっと長崎について知りたいと思ったからです。

現地で平和式典に参加して、児童合唱のクスノキ、長崎市長・鈴木さんの話が特に印象に残りました。理由は、児童合唱では、自分と同じくらいの年齢の人が世界に向けて気持ちを込めて歌っていたのと、長崎市長の演説で「ノーモア広島 ノーモア長崎 ノーモアウオー ノーモアヒバクシャ」という言葉にとても気持ちがこもっていて、鳥肌が立ったからです。

小倉での平和学習では、もし長崎ではなく小倉に原爆が落ちていたら当時小倉にいた方たちが被害をうけ、たった一つの命が奪われるだけで何世代もいなくなってしまうということを考えさせられました。

被爆者の平均年齢が86歳を超え、年々原爆について語ってくれる方が減ってきているので、私もこの平和学習で学んだことを積極的に次の世代に教えていきたいと思いました。

## 応募理由

私がこのプログラムに参加したいと思った理由は、6年生の時、総合の授業で長崎の原爆について学び、当時13歳の方からリモートでお話を聞いたからです。その方のお話の中には原爆が落ちた事で起きた病気や、どれだけの人が亡くなったか、平和とは何かを教えてくださいました。私も今年で13歳になるので、自分が同じ状況になったら何を思うのか、実際に悲劇が起きた場所で色々見て学んで感じたいと思ったからです。



## 三度目の原爆は許されてはいけない ということ伝える

### 派遣報告

#### 長崎派遣プログラムで学んだことを未来へ伝える

私が長崎派遣を通して思ったことはたくさんあります。現地に行って戦争の悲惨さを知ったこと、戦争や原爆をどう伝えていくかということです。

ピースフォーラムでは平和な世界を願っている人が大勢いました。もちろん私もそうです。こんなにもたくさんの方が平和にしたいと思っているのに、まだ世界では戦争をしている国がたくさんあります。このようなひどいことが日々エスカレートしていくと、また核兵器が使われるかもしれません。そうならないために、私たちは少しでも争いのない平和な世界になるために、努力していくことが大切だと思います。

また、被爆体験者の三瀬さんの話を聞くことができ、テレビやニュースより生の声を聞くほうが、三瀬さんの気持ちや感情が心から伝わってくるような気がしました。長崎に行かないと経験できないようなことをさせていただき感謝しています。最後に三瀬さんは「平和は人類共通の世界遺産です」とおっしゃっていました。その言葉は深く考えれば考えるほど、忘れてはいけない言葉だと思いました。私は戦争の苦しみや悲惨さを、未来へ伝え続けていこうと思います。これで終わりではなく、これからも学び続けようと思います。

### 応募理由

私が参加したい理由、一つ目は広島生まれの母が原爆に興味がありその影響でわたしも興味が出たからです。去年は広島に行く機会があり、原爆ドームにも行きました。そして、原爆や戦争の事をもっと知りたいと思いました。次は広島だけでなく長崎の事も知りたいと思います。二つ目の理由は、報告会を聞きに行ったとき知らない事がたくさんあったからです。わたしも現地に行き、自分の目で原爆のおそろしさを知りたいです。

私の  
平和宣言

## 世界中のみんなが笑って過ごせる未来を作る

## 派遣報告

## ぼくの平和への願い

戦後80年の今。「80年」という年月が経ち、平和と言えるような世界になったでしょうか。ぼくは、そうは思いません。地球上では未だに戦争がおきていて、原子爆弾は12405発あります。その1発で、長崎では7万5000人もの方が亡くなりました。ぼくは、このことがものすごく悲しく、こわいです。ぼくは長崎原爆資料館に行き、原爆のおそろしさを知りました。唯一の被爆国の日本に住んでいるからこそ、ぼくが未来に原爆のことを伝えていかなければなりません。

ぼくは、長崎の現地に行き、さまざまなことを感じました。まず、長崎に入ってから、今でも骨がうまっていると思うと、ごめんなさいという気持ちになり、爆心地に行くと、その時の状況が目の前にうかぶような気がしました。

長崎に行ってから、ぼくが思った平和への願いは、安心してご飯が食べられ、ぐっすりねむれる。そういった当たり前の毎日をいつまでもみんなが過ごせることです。

## 応募理由

ぼくは、学校で戦争や歴史の勉強をそんなにしたことがないなと思い、図書室で戦争の絵本や小説を読みました。そこには小さい子供が亡くなってしまったり、戦争に行った父親が亡くなって、主人公が泣いている事などが書いてあり、この事が本当にあったと思うとものすごく悲しい気持ちになりました。人間はなぜ戦うのか、なぜ長崎に原爆を落としたのかなどを知って、友達や家族に伝えたいと思い応募しました。

---

## G班（長崎）

---



ユースリーダー 和田 萌々香  
班長 飯田 翔太  
小野寺 泰那  
福田 夏菜  
倉島 小春  
森 聖響

私の  
平和宣言

## 記憶を受け継ぎ、平和の種を育てていく

## 派遣報告

## つなぐ

「これからは私たちが伝えていかなければならない」

今回の派遣を通して一番強く思ったことだ。私は今回3回目の派遣で、小学生のころに広島と長崎にそれぞれ行き、今回は2回目の長崎派遣だった。3回の派遣の中で私は被爆者の方からお話を伺い、多くの人と平和について考え、様々なことを感じた。

戦後80年を迎え、被爆者の平均年齢が86歳を上回った今、これまで教えてもらったこと、感じたことを次は私たちが伝えていかなければならない。被爆者の方が必死に私たちに訴えかけてくれたこと、そしてその思いをつなぐために私たちは行動していく必要があると強く感じた。

被爆者の三瀬さんがおっしゃった次の言葉が深く胸に刻まれている。

「今私たち被爆者はこうして伝えることで平和の種をあなたたちに一つずつ与えている。それをどうか大切に育ててほしい」

三瀬さんをはじめとする多くの被爆者の方が次の世代に平和の種をまいてくれている。私は絶対にその思いを無駄にせず、平和のために行動し続け、世界を平和の花で満たすことができるよう思いをつないでいきたい。

## 応募理由

2017年の夏、小学5年生だった私は、藤沢市長崎平和学習に参加し、仲間たちと共に核兵器の脅威について学んだ。8年後の今、私は大学生となり、小学校教員になるため日々学んでいる。ユースリーダーとして小中学生等を取りまとめ、平和についての強いメッセージを発信したいと考え、長崎派遣への参加を希望する。原爆投下から80年、改めて長崎を訪問し、自らの言葉で次の世代へと平和のたすきを繋いでいきたい。



## 明日の心配をする必要がなく未来に 希望を持てる世界へ

### 派遣報告

#### 平和について主体的に学び伝える

私は今回の平和学習において実際に現地に行ったからこそ得た学びが多くありました。

まず、被爆について知ることができるのは当たり前ではないということです。被爆体験者の三瀬さんから話を聞いたことや原爆資料館のガイドの方から、「辛くても被爆体験を書き残してくれる人がいる」と聞いたことで、体験を見たり聞いたりすることができるのは貴重なことだと改めて感じました。同時に、辛い記憶を思い出してでも未来へ記憶を残そうとしてくれているのだから、私たちには被爆の実相について知り、考え、伝えていく責任があると感じました。

学習の最後に北九州へと行くことができたことも非常に貴重な体験となりました。長崎に落とされた原爆は北九州の小倉に落とされるはずでした。そのため、北九州の人は原爆が落とされていたら自分たちはこの場にはないと、原爆に対して当事者意識を持っています。我々もそうした意識を持つことが平和への一歩につながるのではないかと感じました。

### 応募理由

私は研修旅行で訪れた広島で、原爆により人が影になっている資料を見て、今までどこか現実味を持たずにいた原爆被害の悲惨さを目の当たりにした。そこで私は、同じように実際に長崎に行くことで得られる学びがあると思い、この事業に参加しようと思った。また、私は自衛隊に興味があり、調べていく中で「平和とは」という問いが浮かび、この事業の中で、多様な考えに触れ、平和についてより深く考えられるのではないかと考えた。

私の  
平和宣言

## 学び、考え、伝え続ける

## 派遣報告

## 10歳の戦争

「明日の朝、生きていられるのかと何度も思った」この言葉が、長崎派遣を終えた私の耳に今でも残っている。私は長崎で被爆者の三瀬清一郎さんからお話を伺った。当時の三瀬さんはわずか10歳で、私が同じ年齢の時「このご飯はあんまり好きじゃないんだよね」などと言っていたことを思い出した。三瀬さんは10歳という年齢で戦争によって追い詰められていたのだ。「幸せな子供」が言えるような文句など、まず言えなかったのだ。

今、世界に核は12,405発ある。もっと増えているかもしれない。80年前、長崎、広島に落とされた原爆の何千倍もの威力がある今の核兵器を12,405発落としたり、地球はどうなってしまおうのだろうか。核廃絶、戦争のない世界を作る事は、決して被爆国の日本だけの問題ではないのだ。全世界で協力して解決しなければならない問題なのだ。

私は長崎派遣に行き、戦争の悲惨さ、人間の欲などを感じた。全世界で平和に暮らせる日を一刻も早く作るために、私は友達や家族だけではなく、日本全体、世界全体にも学んだことを伝えていきたい。そのために私は伝えられる、話を聞いてもらえるような人間になりたいと思った。

## 応募理由

私は小さい頃からたくさん本を読んでいました。その中でも特に記憶にあり、今でも読み返す「本当にあった戦争と平和の話」「碑」があります。これらの話を讀んだ小さかった頃の私は、原爆や、未だに滅びる事のない戦争に深い苛立ちを感じました。それは今でも変わることはなく、最近になり、私がこの問題に対して今より深く考え、解決に繋げる為には実際にその場所に行き、起こった事実を知ることが未来に繋がる事だと思いました。

私の  
平和宣言

## 戦争の恐ろしさや平和の尊さを学び、 当たり前の日常を大切にしよう

### 派遣報告

#### 私なりの平和と行動

神奈川県から長崎県・広島県はとても遠く、知り合いに被爆者がいない私は、原爆が恐ろしい被害をもたらしたということは知っていたが、今回長崎を訪れるまで、その威力をうまくイメージすることができていなかった。80年も前ということもあって、「自分事」として捉えることができていなかったからだと思う。しかし被爆体験講話を聞いたり、必死に核廃絶を訴える姿を見ることで、今世界は平和な状態ではなく、同じ地球という空間に住んでいる私にも、関係のあることだと感じた。もし、自分の使っている家具や食器がこんな風に変形したら…自分がこんな熱線や爆風を浴びたら…と想像して、今、当たり前で過ごしている日常が奪われてしまう辛さを理解し、自分事として捉えられるようになった。また、平和や自分と相手の違いについて話し合うプログラムに参加して、色々なとらえ方を知り、更に自分事として捉えることができた。今回の訪問で特に印象深かったのが平和祈念式典だ。被爆者合唱や児童合唱では、一人一人が平和への想いを込めて歌っているのを直に感じ、本当に感動した。式典の途中で雨が止み、少し晴れてきたことも、鮮明に記憶に残っている。まるで、長崎にいる私たちの平和への想いが、亡くなられた被爆者たちに伝わったかのようで、少し嬉しくなった。長崎を訪れて初めて、被爆者などの人たちが、必死に核廃絶を訴え続けている理由がよく分かった。帰宅後も、平和について自分なりに考えている。平和とは、世界中の人々が、日常を過ごせることだと思うようになった。今はまだ、地球の上で戦争をしている国や、核兵器を持っている国があるが、「地球市民」である一人一人が平和の尊さを知れば、きっと世界に平和が訪れると思っている。そして、長崎で学んだことを周りの人に話すことが大事だと考えた私は、夏休み明けの学校での平和学習発表の際に、学んだことを伝えようと、台本を一生懸命考え、努力した。クラス代表に選ばれば、全校生徒の前で発表することができたが、残念ながら私は選ばれなかった。それでも、平和への一歩を踏み出したのではないかと考えている。またこのような機会があれば、被爆者の思いなどを伝えたいと思う。そして、今度は広島県や、激しい地上戦があった沖縄県などを実際に訪れてみて、そこでしか学べないものを学び、まずは家族、友人など、身近な人から伝えていきたいと思っている。

### 応募理由

私は、以前「はだしのゲン」のマンガを読んでから、戦争は怖いという漠然としたイメージだけを持っていました。しかし、小学校高学年で戦争や原爆の歴史、恐ろしさ、物語などを学んでから、「怖い」という感情よりも、「もっと知りたい」という気持ちが上回り、学校であまり学んでいない、長崎のことについて知りたいと思いました。現地で、爆風の悲惨さをつたえる一本柱鳥居を見たり、被爆体験講話を聞いてみたいと思います。

私の  
平和宣言

## 今のくらしにかんしゃを！！

## 派遣報告

## 今ある命を大切に

長崎で私は三瀬清一郎さんという方にお話を聞いてきました。

10才で被爆し深い心のきずをおった清一郎さんは原子爆弾が落とされた際、次々と焼けていく死体や食糧難に苦しみ、太陽が落ちてきたと思うほどの惨劇だったそうです。それを聞いて私は本当に原子爆弾が怖くなった。原子爆弾は不幸しか生みません。

人の命をいっしゅんにしてうばい、心もずたずたに引きさく。そんな原子爆弾は今もたくさん存在している。いつまた”3回目”がくるかも分からない。長崎を最後の被爆地にするために”私たち”は原爆のおそろしさを伝えていかなければいけない。ゆいいつの被爆地に住む日本の”国民”としていつまでも平和をちかい、私たちのくらしにかんしゃをする。それが私たちのできることである。

## 応募理由

五年生の国語で、「たずねびと」という物語があり、そこで、先生が被爆者で引きとり手のいない人のポスターを持ってきて、そこには、同い年の子や赤ちゃんもいて、心がキュッとしめつけられる感じでした。「この子たちは、どんな思いで死んでいったんだろう」と思って、夜もねむれませんでした。そこで長崎に行って、もっと核兵器のことを知って、「風化」をなくしていきたいです。

私の  
平和宣言

## 平和な世界をつくる一人になりたい

## 派遣報告

## 核のない平和な世界へ

僕は平和学習長崎派遣プログラムに参加して、戦争の事を学び、戦争がどれほど怖く、そして平和がどれほど大切なものか、良く分かりました。

長崎に落とされた原子爆弾はファットマンと呼ばれ、その大きさは、長さ約 3.25 m、直径約 1.52 m、重さ約 4.5 t でした。僕はこれまで、数字だけは知っていましたが、実物大の模型を見た時、想像していたよりも小さく感じて、すごい被害があったのに、こんなに小さい物だったのかと驚きました。被爆された方のお話を聞いて、僕はもっと戦争の事を学んで、戦争がない世の中にするにはどうしたら良いのか考えたいと思いました。そして、平和について考えて、僕の周りの人に平和の大切さを伝えたいと思いました。

世界には核兵器が 12,241 発もあるそうです。この 80 年で、日本以外では一度も使われていないのに、こんなに沢山の核兵器が必要なのでしょうか。これ以上悲しい思いをする人を増やしてはいけないと思います。

平和はひとりの力だけではつくれないと思います。ひとりひとりが平和について考えて、みんなで平和な世界をつくっていけるよう、僕は自分自身ができる事を考えていきたいです。

## 応募理由

家族で渡嘉敷島に旅行に行った時、戦争でたくさんの方が亡くなった場所を見ました。そこは、森のおくで薄暗い場所でした。そして、集団自決という言葉を知りました。1300 人しかいなかった小さな島で、集団自決で 300 人以上の方が亡くなった事にショックを受けました。それから、ぼくは戦争についてもっとちゃんと知りたいと思うようになりました。なので、この平和学習広島・長崎派遣プログラムに参加したいと思いました。

## 引率者感想

### 広島引率者（平和の輪をひろげる実行委員会 田中 章代表）

今年度の広島平和学習プログラムは、原爆の子の像の前で行われた平和メッセージを読み上げる平和セレモニーに始まり、平和記念資料館見学や被爆体験証言者の講話聴講、平和記念式典参加、さらには被爆電車への乗車体験など、多面的に学びを深められる内容であった。猛暑にもかかわらず、生徒たちは疲れを見せず、真剣な眼差しで平和について思いを巡らせており、その真摯な姿勢は今も心に残っている。また、今回の派遣プログラムで各班を率いた大学生ユースリーダーは生徒と大人の同行者との間に立ち、活動内容の確認や安全面への配慮、移動時のサポートなど、細やかな気配りで全体を支えてくれ、改めて感謝の意を表したい。

2025年は敗戦から80年の節目に当たり、国内外から多くの来訪者が広島を訪れていた。今回の貴重な体験が、生徒たちの今後の人生において平和を考え、主体的に行動する契機となることを心から願っている。

### 長崎引率者（平和の輪をひろげる実行委員会 溝口 悠路委員）

戦後80年。人々の弛まぬ平和の継承と、たった1回の過ちで0にリセットされる脆さが共存している現状を学び、更に遺構や被爆者の方の貴重なお話を伺うことで参加者全員が、自分に課せられている使命が何かを考える、有意義な時間になったと思う。また、今年度の長崎派遣は、例年の行程に小倉でのピースフィールドクラブとの交流が加わり、一人ひとりが自分の考えや思いを交換する場が増え、より充実した4日間になったことだろう。8月8日の青少年ピースフォーラムでの講演の際、被爆者の三瀬清一郎さんがおっしゃった「平和は人類共通の世界遺産です！」という言葉が、今でも心に強く残っている。誰しも一人では生きていけず、様々な人たちとの関わりの中で成長し毎日を一生懸命に生きている。一人ひとりが抱える不安や葛藤、悲しみなどはそれぞれ違えども、お互いを認め合い、理解しようとする平和の喜びをそれぞれの心に行き渡らせることができたと思う。紡いだ平和の灯を大切に、今後の平和活動に繋げていきたい。